

ほなほ歴史通信

第94号

2020 (令和2) .3.1

調査が進む大子の城跡

絶え間ない戦乱の中で、武士・民衆・商人・職人・宗教者が躍動した中世。そんな時代を物語る身近な文化財は城跡ではないでしょうか。中世に、陸奥・常陸・下野三国の境界地域として、度々戦乱の舞台になるとともに、遠征する軍勢の通り道であった大子地域には多くの城が築られました。大子町のホームページによると三〇ヶ所もの城跡が紹介されています。しかし、近年の調査によって、大子町内の城跡は四〇ヶ所前後あつたと確認されています。一〇ヶ所程度の新しい城跡が発見されているのです。

近年、インターネットの普及によつて、趣味で城めぐりをしていいる人が、自分の訪れた城の情報を自由に発信できるようになりました。こうした人たちの中から、県内の城郭を調査するグループが立ち上がります。その一つが「茨城城郭研究会」で、同会の調査成果は茨城城郭研究会編『図説 茨城の城郭』(国書刊行会、二〇〇六)、同編『続 図説 茨城の城郭』(国書刊行会、二〇一七)に結実しています。同書物のなかで、大子町内の城郭は一八箇所も取り上げられており、戸中要害、頃藤要害等、大子町のホームページには掲載されていない城郭も紹介されています。こうした民間の研究グループの着実な成果が、新しい城跡の発見につながっているのです。

平成三十年度から五カ年計画で、茨城県による「中世城館跡総合調査事業」が始まりました。これは、「県内の中世城館跡について、遺構の所在・構造・現況・範囲等を悉皆的に調査し、さらに古文書・古絵図・地名・伝承等の資史料で裏付けることによつて、新たな歴史的遺産としての価値を掘り起こし、遺跡としての保存・整備・活用のための計画策定や、新たな史跡指定に向けた基礎的資料の整理を図る」ことを目的としています。城郭研究者及び自治体の文化財担当職員、民間の研究者等が調査員となり、現在精力的に調査が進められています。その成果は、報告書として刊行される予定です。

同事業の調査員になったり、個人的に協力をしている茨城城郭研究会のメンバーの活躍によつて、大子町内の中世城郭の発見が続いています。同研究会では、地域に残る小字や俗称地名(大子町を含めた県北地域では、「ゆうげえ」「りゆうがい」など、城郭が構えられたことを示す「要害」に通ずる地名が多く残っています)、古文書や江戸時代以降の地誌に記された城郭情報、登山愛好者からの目撃情報等をもとに、実際に現地を訪れ、堀や削平地等の城の痕跡を発見しています。この他にも、実際の地形や城郭配置をもとに当たりを付け、現地を訪ねることもあります。こうした地道な調査によつて、新しい城郭が紹介されるとともに、これまで知られていた城郭の調査も深まっています。

城跡は、目につきにくい場所に残っているため、なかなかその存在が知られないまま、土塁は崩れ、堀も土に埋まってしまっています。さらに、開発行為によつて破壊され、跡形もなくなってしまうこともあります。しかし、城跡の存在が知られていけば、その調査・保護を行うことができます。県や民間による城郭調査が、大子の城跡を守っていくための大きな一歩となることを期待しています。

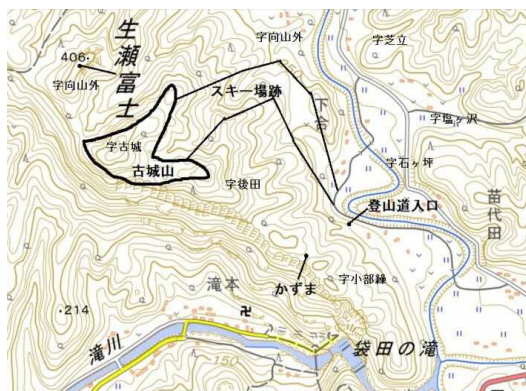
(藤井達也)

なませ こじょう
生瀬古城 (大子町小生瀬字古城)

高橋宏和

生瀬古城は、袋田の滝の北西約九〇〇メートルの地点、滝の北側に連なる断崖絶壁の上にあります。東の下合集落との標高差は約二〇〇メートル、城址の西隣にある生瀬富士への登山道の途中でもあるため、東から登ることが出来ます。

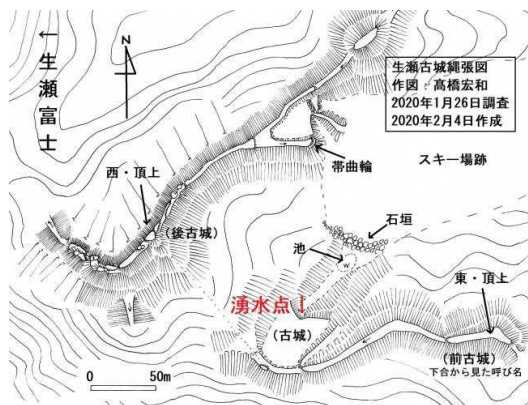
城の構造ですが、大変展望が良く物見台として使われたであろう頂上が東西にそれぞれ一か所あり、西側の頂上には露出した岩を用いた城塁の他、北東先端に帯曲輪らしき平場が見られます。そして、この二か所の頂上にある広さ約二五〇平方メートルの平場(鞍部)が、地元で古くから伝わる「古城山」です。



以上のように、僅かに平場を設ける以外は土塁や堀といった明確な遺構は無く、急斜面や岩盤といった自然地形をそのまま利用した山城です。大子町内では池田の鏡山城、常陸太田市の竜神大吊橋向かいの高倉竜ヶ井城など、県北で多く見られるタイプの城で、非常に高い防御力を誇ります。

城の歴史については、古くから伝えられている割には不明な点が多く、幕末に加藤寛齋が記した「常陸国北郡里程間数之

記」(国立国会図書館蔵)の中に、「峯ト峯トノ間ニ平坦ノ地アリ」や「野内月居齋ノ居城ナリト」等と書かれている程度です。この中で、野内月居齋というのは南にある月居山に築かれた月居城の城主とされる人物です。時代・歴史については不明ながら、野内氏が城主、二つの頂上に挟まれた広い平場の存在、頂上は平場以外では岩盤などを城壁に用いている、月居城には峠道が通り、これを監視しているのと同様に、生瀬古城の東には「かずま」と呼ぶ峠道が通っている、そして、城主の普段の居住地が不明など、月居城との類似点が多く見られます。



月居城は、その形状から依上地方のシンボルのように扱われていたと思われますが、周辺の山が高く、谷も深いため死角が多く、これを補うために、周辺の監視や伏兵などを置けるように築かれたのが生瀬古城で、月居城の支城であったのかも知れません。平時は生瀬や袋田それぞれの土地に住んでいるであろう兵士達は、戦時に、太田などからも駆け付けた者達と共に、この山上に集まって敵に備えたのかも知れません。

なお、古城山の東には、かつて計画されたスキー場の建設予定地跡があり、それによる巨大な石垣や池が見られます。また、古城山には「立神山」の看板が設置されていますが、古くからの生瀬住民にこの名称は、あまり馴染みが無いものと思われれます。(茨城城郭研究会)

大子町の新発見城郭その二・左貫要害について

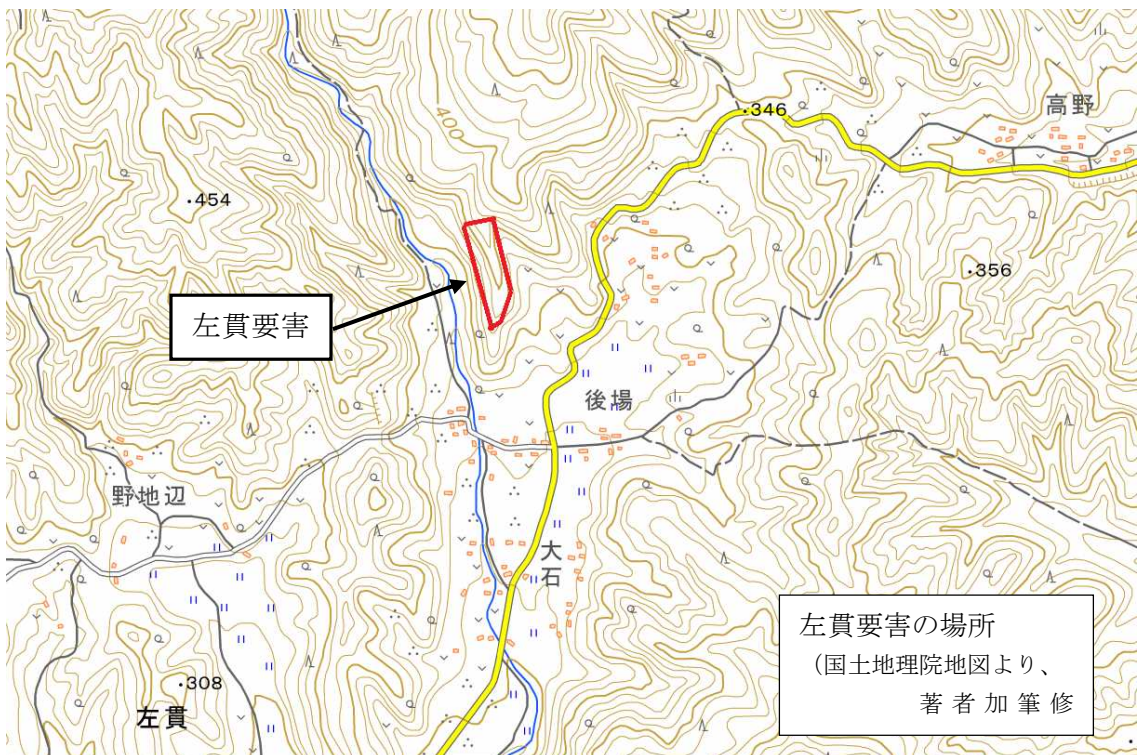
五十嵐雄大

大子町左貫には、立岩に左貫館と呼ばれる城郭遺跡があります。これとは別に城郭遺跡が残っています。場所は、左貫字竜害曾根にある山城跡です。竜害とは、山城を示す言葉「要害」が訛った言葉であります。

遺構は、標高三〇〇メートルの山塊に堀切と腰曲輪で出来たシンプルな構造です。南側と西側への備えを意識していますので、佐竹氏や那須氏に対して白河結城氏が築いた城と考えられます。この城から東へは、八溝山や黒沢地域へ抜けることができます。このことから、街道監視の城と考えられます。(茨城城郭研究会)



左貫要害本郭北側の堀切
(撮影・提供 青木義一氏)



私のマラソン人生 (三)

小室健二

大子町では、昭和三十八年（一九六三）二月二十三日に大子町体育協会が発足し、大子のスポーツは益々盛んになりました。青年会の活動と体育協会の盛り上りの中で、県内各地で開かれる駅伝大会でも大子町の青年が上位入賞を果たすようになりました。

昭和三十九年十月三日、東京オリンピックの聖火が大子町を走り抜けて町民の盛り上りは最高潮に達しました。昭和四十一年八月には、砲丸投げの糸井一義選手が茨城県青年大会で優勝し、全国青年大会に出場しました。十二月には第一回大子町民マラソン大会が開催されました。

昭和四十二年十一月、私も目標がかなって青森―東京間都道府県対抗駅伝大会に茨城県代表として出場しました。七日間のレースの中で二回走り、区間三位の成績を収めることが出来ました。昭和四十三年にも同大会に出場しました。同年大子一高レスリング部、大子二高山岳部が全国大会に出場しました。九月には、県民総合体育大会陸上競技の部で大子町が総合優勝をかざりました。十月には、第一回町民体育祭が開催されました。陸上競技を初めレクリエーション、体力テスト、卓球、野球、庭球、バレーボール、サッカー、剣道、柔道が各地区対抗で行われ、総合優勝に大子地区、準優勝に宮川地区が輝きました。

昭和四十四年には第一回八溝マラソン大会が開催され、八溝山登山口鳥居下をスタート地点として頂上まで多くの若い人が健脚を競いました。

昭和四十九年十月に茨城国体が開催され、大子町は山岳競技の会場になりました。二階堂章信監督のもと、大子一高チームが山岳競技高校の部に出場し、団体最優秀の成績を収めました。同国

体では他の種目でも多くの選手、監督が活躍しました。

昭和五十二年には走る仲間の集まりの場として、下小川走友会を設立。私が代表をして幅広く仲間を誘い、県内外のマラソン大会、駅伝大会等に参加し、上位入賞を果たしました。その後も全国大会に出場する大子町の青年が相次ぎました。

昭和五十六年十一月、全国青年大会一万メートルの部で小野瀬晃一選手が第三位に入賞し、翌年の第二五回東日本縦断駅伝大会（旧青森―東京間都道府県対抗駅伝大会）にも茨城県代表として出場し、区間三位の成績を収めました。

昭和六十一年一月一日、第三〇回保内郷一周駅伝競走大会が実施されましたが、これをもって大会は中止になりました。各地区の若い力、青年会員の減少と交通事情によるもので、やむをえない事だったのでしょうか。淋しい思いはありますが、私は幸せもなかったと思います。第一回から三〇回まで連続出場が出来て、三〇回の区間賞もいただき、地元下小川の五年連続優勝にも貢献出来る喜びをいただいたのです。保内郷一周駅伝競走大会は、私にとってマラソン人生を歩み始めるきっかけであり、いつも私の心の中で応援し続けてくれる存在でした。

なお、同年十一月二十三日、第一回大子町駅伝大会と大子町スポーツ少年団駅伝競走大会が同時に、池田周回コースで実施されました。（続く）

（大子町在住）



保内郷一周駅伝競走大会を走る筆者

大子町・鎮守の杜（一〇）

諏訪神社（大子町西金字寄居二四九）

高根信和

JR西金駅から国道一一八号線を渡り、集落の小径をぬけると旧西金小学校に着く。諏訪神社の参道は校庭の端につくられている。大正十年（一九二二）三月二十七日建立の御影石の神明鳥居をくぐり、ゆるい上り坂を過ぎて十数段の石段を登ると境内に着く。手水舎、文政十年（一八二七）奉納の手水石、三対の石燈籠が左右に配置されている。その一つ、拝殿前右手の燈籠には「文政元年 川井伴介道定 小室彦蔵」の銘、「永代三油寄進」の文字が刻まれていた。

拝殿の正面に、出雲大社千家尊福筆の「諏訪神社」の額が掲げられている。拝殿は間口二間、奥行き五間の十坪、本殿は間口一・五間、奥行き一間の一・五坪で、覆屋がかけられ保護策がとられている。神紋は巴紋である。

祭神は建御名方命（たけみなかたのみこと）。社伝によると、天下の奇祭御柱祭で知られている信州諏訪信仰の総本社の本宮である上社から分霊を西金村狐平に鎮斎（口伝）後、現在地に遷座し、当村の鎮守となったと伝えられている。五穀豊穰、交通安全、開運長寿の神として人びとの信仰が厚い。

明治六年（一八七三）四月十五日村社に列格。昭和二十七年（一九五二）一月十一日に宗教学法人を設立し、今日に至っている。

境内左奥には、稲荷神社、天満神社、愛宕神社、山神社、素戔嗚神社の末社が鎮座している。その前に並んでいる石燈籠のうち右手のものには、「正面に「常夜燈」の文字、その下に「筆子中」、竿の部分の左側に「文政十二巳丑季十一月二十有五日」、裏手に「世

話人川井竹之助 同姓八兵衛 小室虎之助」の三名の名前が刻まれている。

境内には神庫、神輿社が建てられ、その中には神輿、子ども神輿が保管されている。境内の清掃に来られた老婦人に聞いてみると、以前は神輿の巡行があり、村中が大にぎわいをみせ、人びとの笑顔があふれたが、年々さびれてしまい、今は神事が行われていないとのこと。「寂しい限り」と話してくれたのが印象に残っている。「どこでも同じですよ」と答え、時代の流れは止められないことを改めて感じた。

境内には樹齢百年以上の大スギが手水舎側や拝殿の両側、末社の裏手に合わせて四本、空高くそびえている。まるで諏訪大社の御柱のように。また、末社北側面には石尊供養塔、加波山の石塔があり、民間信仰の跡もしのばれる所である。

拝殿前には、大子町氏子総代会が作成した「大子町鎮座まつぶ」と大子町奥久慈開運めぐり四一社のスタンプ用紙が置いてあり、スタンプを集めながら開運社巡りを楽しめるよう便宜が図られている。（水戸市在住）



大子町の経済更生運動と

農村改良劇「栄ゆく村」(四)

昭和十年(一九三五)三月、帝国農会は『農村更生と中心人物』と題した一冊の事例集を上梓した。全国の経済更生計画指定町村四千六百余りの中から十数町村について、現地調査を行い、その結果七町村を選定して経済更生計画の実例を収録したものである。その七町村とは、山形県梨郷村、兵庫県志染村、同県山田村、愛知県三好村、同県三和村、茨城県園部村、そして大子町である。

大子町が選ばれた理由は、「大正十五年以来、農事共同組合を組織統制し、農事経営の多面化を計り、漸く急ならんとする不況の克服に尽粹して其の成績良く、曩に茨城県及び帝国農会より表彰され、今又昭和七年度経済更生計画村として県の指定を受け、あらゆる機関の全機能を遺憾なく發揮して、鋭意防貧に努め、農村文化の旗幟鮮明に、其の達成を期せんとして居る。而も七千の大衆を更生の壮途に就かしめたのは、実に若冠無位、一介の農会技手と百畝の灰土を耕す百姓の一群が金力も権力も抜きにして、ホントの農村文化に憧れて採つた処の真剣な態度と着実な実行とが然らしめたものに外ならない」(『農村更生と中心人物』)と評価されたことである。ここに記された「若冠無位、一介の農会技手」とは、言うまでもなく大子町の経済更生運動の中心人物となった藤田里盛のことである。藤田は、大子町山田出身で、大正七年大子農学校卒業、同十年県立農事試験場甲種技術養成所卒業、技手となり、土浦分場の主任となる。栃木県安蘇足利両郡農林技手勤務、同十五年大子町農会技手となった。

当時の大子町の農家は、貨幣経済が発達する中で、負債が増大し、自作は小作に没落し、中小の地主は土地を手離すなど農民の貧窮化が現われ始めていた。藤田技手は、こうした状況を克服す

る手段として、農事共同組合を組織し、農業経営の多角化を勧奨した。農事共同組合の目的は、隣保互助、農家の共同化であり、翌昭和二年頃から同七年にかけて二八の組合が設立された。次のような「大子勸農歌」がある。

何事するにも共同に
此処が疲弊のどん底よ
無益の冗費を省きつつ
大和男子と生まれては
永久に動かぬ国体の
下みてはげめ己が業
鋤取るこの身の楽しさよ
錆は心のゆるみから
農事改良に努力せよ
再び帰らぬ今日の日を

共存共栄に努力せよ
立てよ揮へよ国のため
幾許なり共財を積み
富国の道を計るべし
基を固めん諸共に
広い田畑に活々と
何時も光らせ鋤と鎌
皆一同精出して
そして理想は高くとも
勤めよ励めよ諸共に

(『農村更生と中心人物』より)

いささか戦前の国家主義的な意味合いの濃い言葉が並ぶが、これが当時の組合組織の規範であつたらう。

また藤田技手は、農業経営の多角化を目指して、新しい作物の導入にも取り組んだ。当時、大子地方で栽培されていた農作物には、米、大小麦を始めとして、大豆、小豆、えんどう豆、そらまめ、いんげんまめ、大角豆、落花生、粟、稗、黍、蕎麦、とうもろこし、胡麻、甘藷、馬鈴薯、さといも、蒟蒻芋、漬菜、だいこん、にんじん、葱、牛蒡、茄子、胡瓜、南瓜、かぶ、しょうが、とうがらし、らっきょう、楮、葉煙草、桑葉、茶葉、れんげ、梅、桃、李、梨、柿、葡萄、栗などがあつたが、そこに、きゃべつ、西瓜、蕃茄、玉葱、白菜、キュウリ(促成栽培)などの新しい作物が導入された。(続)

(井上和司)

産地づくりに向けた公的支援の展開（下の五）

—特産品・りんごのルーツを探る（一四）—

昭和三十七年、病虫害防除の最先端大型防除機と言われた初のスピードスプレーヤー（以下SSと略）がりんご生産者たちの期待を背負って導入されたことは前号で述べた。左上に掲載した写真が、当時黒田りんご園で稼働中のSSである。このSSの導入時期については、やはり前号で、茨城県では極めて早かったことを一つのコメントとして述べておいた。

さて二つ目は、作業効率の高さである。例えば、動力噴霧器に比べて「労力で一〇分の一〜二〇分の一、薬剤費で二分の一に経費が節減されている」（『農業茨城』昭和三十六年四月号）、との指摘がある。労力も経費も、飛躍的な削減ぶりである。ご主人の黒田宏さんとともに防除作業に取り組んだか子さんは、「効果はありました。あれがあったから栽培が成り立った。手なんかでかけていたんじやあ長続きしませんでした。スピードスプレーヤーを入れたのが一つの大きな画期でした」と振り返っている。



また、かなり遅れて昭和四十五年に導入された地区の木澤源一郎さんは、SSの効率の良さを次のように述べている。動力噴霧器の場合には、一回の散布に二日から三日かかった。とくに、夏の暑い時期には皮膚を保護するので余計に暑いし、暑くてまいっちゃうんですよ。もう体

がもたない」状態だった。これに対してSSの場合には、「動噴なら噴口が一つしかないが、SSは三〇個ぐらいついている、噴口が、だから広範囲に防除できるんです。三〇個ぐらい半円形にあつて、上から横から（薬剤が）いっぺんに出る、送風機で遠くまで飛ばせる。移動しながらバアツてやつていく。葉を完全に行き渡らせようとするにはSSでないため。広い面積に（動噴で）葉をかけるとどうしてもムラができてしまうが、そこから病気や虫が発生するので、全体にひろがるように、しかも葉の裏表全部に行き届くようにするにはなるべく葉を薄くして量をたくさんかける、すき間なく覆うように撒くのが原則。SSは、風で吹き付けるから葉っぱが揺れてすき間なくかかるんです。今まで一日かかった作業が、ほんの二〇分位でできるんです。運転しているだけ。あまり暑い思いもしないで散布できる。これはもう革命的な出来事だったんですよ」と。「画期」であったり「革命的」であったり、これがSSを利用した生産者の実感であった。

三つ目は、導入された地区についてである。前号で引用した記事の中に、黒田宏さんや有賀静さんがSSを利用して病虫害防除に張切っている旨の文言があったが、これで分かるように、最初に導入されたのは生瀬地区であった。黒田さんや有賀さんは、大子地域に初めてりんごを導入し、試行錯誤を重ねながら栽培の定着を図ってきた世代である。この頃はすでにりんごを販売しているから、成木となったりりんご園を効率よく防除するにはどうしてもSSの導入が必要であったのだろうと思われる。なお、このSS導入前後の頃かと推測されるが、大子農協りんご部のなかに地区割の仕組みが設けられた。生瀬は東部地区、浅川、上岡、依上は西部地区、西金は南部地区、矢田、川山、下野宮、高田は北部地区とされた。この地区が、県や町からの補助金の受け皿となり、また各種指導を受ける場合の単位ともなった。この地区割は、今日でも踏襲されている。

（齋藤典生）

大子の今昔 写真帳

No.3

J R 常陸大子駅

昭和2年(1927)3月開設

昭和11年(1936)増築

昭和20年(1945)頃修理

平成27年(2015)改修

明治末年頃から、立憲政友会の代議士根本正を中心に、保内郷や福島県東白川郡の人々が展開した約20年に及ぶ鉄道誘致運動により常陸大子駅が開業に至った。開業当時は1日に、上り列車(水戸方面行き)が6本、下り列車(常陸大子駅止まり)が6本運行していた。開通により経済活動が活発化し、保内郷の産業は大きく発展した。(大金真理子)



昭和二年



昭和十一年頃



平成二十七年



現在

木造2階建(一部後補部鉄骨造)、寄棟造(南端は切妻造)、浅瓦葺(一部鉄板葺)、桁行全長36.235m、奥行8.208m

(平成28年3月発行『大子町まちなかの歴史的建造物調査報告書』より)

編集 大子町歴史資料調査研究会
編集人 齋藤 典生(大子町歴史資料調査研究員)
井上 和司(大子町歴史資料調査研究員)
藤井 達也(大子町歴史資料調査研究員)
藤田 貴則(大子町教育委員会事務局)
大金 真理子(大子町教育委員会事務局)
発行 大子町教育委員会
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
大子町立中央公民館 ☎0295(72) 1148